

大正・昭和期の都市上中流住宅における水まわり空間の変容過程

—吉田五十八による住宅作品に関する図面史料の分析を通して—

主査 安野 彰^{*1}

委員 大井 隆弘^{*2}, 須崎 文代^{*3}, 田中 和幸^{*4}, 水野 僚子^{*5}

本研究は、近代住宅における水まわり空間の変容過程を明らかにするため、住宅改良が活発に展開された大正から昭和期にかけて活躍し、平面形式等に都市住宅の典型的傾向を示す建築家・吉田五十八の住宅作品を分析した。具体的には、水まわりの設備が描かれた平面図、展開図、詳細図等を用いて、台所・浴室・便所・女中室について、住宅全体の動線計画における位置づけや室内空間の変遷を検討した。その結果、1940 年頃と 1950 年から 55 年頃に変化が集中していることが確認された。そこでは、住宅における表と裏の性格と水まわり空間の関係性が段階的に変化していく様子や、新しい材料や技術の導入がそうした変化に与えた影響が捉えられた。

キーワード：1) 吉田五十八, 2) 住宅, 3) 水まわり, 4) 台所, 5) 浴室,
6) 便所, 7) 衛生, 8) 設備, 9) 図面史料, 10) 上中流

THE CHANGING PROCESS OF THE SPACES FOR WET AREA IN THE UPPER AND MIDDLE CLASS HOUSES DURING TAISHO AND SHOWA ERA - Analyzing the Drawings of Houses Designed by Architect Isoya Yoshida -

Ch. Akira Yasuno

Mem. Takahiro Ohi, Fumiyo Suzaki, Kazuyuki Tanaka, Ryoko Mizuno

This paper clarifies changing processes of wet area spaces in the upper and middle class houses during Taisho and Showa era, analyzing the drawings of works by a Japanese architect Isoya Yoshida. We examined the position meanings in flow planning of the house and the interior about kitchen, bath and rest room. As a result, it was confirmed that changes concentrated in around 1940 and early 1950's. After these turning points, the relation between wet area and public-private characters of the spaces in the house had changed. And it was noticed that using new materials and technologies at the wet area had supported this process.

1. はじめに

わが国の住宅は、大正中期以降に展開された生活改善運動や住宅改良によって、漸次変化を続けてきた。なかでも、給排水設備や電気設備等に関する技術革新や家事の合理化、それらが反映された水まわり空間の変化は、生活のあり方に直結するという意味において看過できない。

都市住宅における水まわりについては、これまでも各方面で論じられてきたが、それらの既往研究は、専門誌や婦人誌、専門書、教科書等に掲載された各時代の先端的動向やメーカーの開発動向について、技術史や商品開発史といった観点を軸に展開されるものであった。しかしながら、そうした技術的な条件や考え方の変化に対して、それがどのように実際の住宅設計に反映されてきたかについては、十分な検証がなされているとは言い難く、水まわり空間そのものの変化を捉えようとした既往研究はほと

んどみられない。これには、住宅作品の裏方部分に対しては、建築家の積極的な言及が少ないうえ、水まわり空間が更新されるサイクルが早いという条件が影響している。すなわち、検証には、継続的な住宅設計の記録として、まとまった図面史料の存在が不可欠となる。

一般に、住宅改良が積極的に実践されたのは、特に大正時代半ば以降とされる。その頃から、戦後に住宅の工業化が顕著になる昭和 40 年代までの半世紀にわたって、都市部を中心に継続的に設計活動を行ったのが、建築家の吉田五十八(1894～1974)である。吉田の住宅作品は、日本の伝統的な住宅様式を基礎にしつつも、大壁を用いた独自の意匠や、起居様式に関する提案を中心に、その近代性が高く評価されてきた。一方で、吉田の作品群を概観すると、南に庭をとる配置や「中廊下」で北側に水まわり

^{*1} 文化学園大学造形学部建築・インテリア学科 准教授 ^{*2} 東京藝術大学美術学部建築科 助手 ^{*3} 神奈川大学非文字資料研究センター 研究員

^{*4} 田中建築研究所一級建築士事務所 代表 ^{*5} 日本大学生産工学部建築工学科 助手

を集中させる平面形式など、一般的な都市住宅のプランに見られるオーソドックスな特徴が目立つ^{注1)}。すなわち、吉田の手がける住宅は、一部において先進的でありながらも、生活に関わる空間の基本的なあり方においては、その当時の日本の都市住宅における一般性が自覚されていたと捉えることが出来る。以上を踏まえれば、日本近代の都市住宅における水まわり空間の具体的な変容過程を明らかにするにあたり、吉田による住宅作品群は、最も適当な研究対象のひとつに挙げられる。

こうした吉田の住宅作品は、規模の点から上中流住宅と考えられる^{注2)}。事実、規模以外をみても、作品中には首相をはじめとする各界の著名人の住宅が多く含まれ、またほとんどの作品に女中室も確認できる。上流層の事例を含んでいることは、これまでの研究が見落としていた論点を導く可能性がある。

本研究では、そうした吉田の住宅作品における水まわり空間について、東京藝術大学美術館に所蔵される図面史料を用いて分析し、その空間的特徴と変容過程を明らかにすることを目的としている。それにより、我が国の都

市住宅における水まわり空間の近代化の過程について一定の指標や既往研究が抱える課題を浮き彫りにできると考える。

吉田の手がけた住宅作品は、現在のところ 142 作品が把握されており、そのうち 121 作品の図面が東京藝術大学美術館に所蔵されている。各作品における水まわり空間を位置づけるにあたって、平面図は不可欠であるため、本研究では、121 作品のうち平面図が残る 86 作品の図面資料を分析対象とする(表 1-1)^{注3)}。

本研究は、分析を以下のように行う。まず第 2 章では、縮尺の大きな配置図及び平面図を参照し、表と裏を分節する動線計画の変遷を明らかにし、住宅の中における水まわり空間の位置づけについて考察する。続く第 3 章では、展開図及び詳細図を用いて、台所、浴室、便所といった各水まわり空間の質的な変化を、平面、断面、材料、設備等の変遷を踏まえて明らかにする。第 4 章では以上をまとめつつ、大正から戦後にかけての上中流住宅の水まわり空間の変容過程として重要な一例を示したい。

また、本研究では、現存する小林邸(16, 1934 年、以下「作品名」の数字は表 1-1 の「通番」を示す)、長谷川邸(33, 1940 年)、吉屋邸(79, 1962 年)、北村邸(81, 1963 年)、岸邸(85, 1969 年)の現地調査を行い、図面だけでは判断できない細部等についても適宜確認を行った。また、東京藝術大学美術館に所蔵される写真資料や当時の文献に見られる記述等も参照している。

なお、当該の図面史料を用いた吉田の住宅作品の分析については、委員の一人である大井が『吉田五十八の住宅作品に関する研究』を記しているが、本研究では、そこでの成果を基礎にしつつ新たな分析とともに再検討を加えている^{注4)}。

2. 配置図および平面図にみる動線計画

水まわり空間は、一般には住宅の中で「裏」や「奥」に位置づけられる。しかし、その性格は、「表」である接客部との関係や、日常的な居室との関係、裏方の諸室相互の関係によって異なるものと考えられる。本章では、こうした観点から、1 表玄関・内玄関・勝手口までのアプローチ、2 表廊下と裏廊下、3 水まわり内部の動線を対象として、その性格の変化を分析する。

2-1 アプローチにみる表と裏

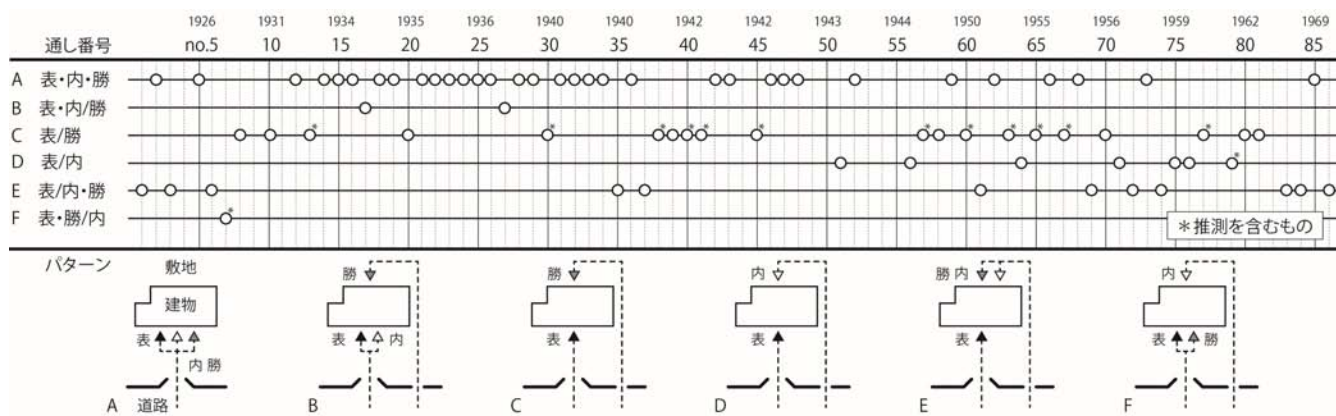
ここではまず、門から表玄関、内玄関、勝手口という 3 つのアプローチを分析する。表 2-1 は、配置図等により、門から各出入口までのアプローチが判断できる 74 作品を対象としている。各出入口の種類については、既往研究と同様、図面中の表記や数に着目して判断した。ただし、表中で「○*」としているものは、図面中の名称や数だけではその種類が判断できないが、既往研究で指摘されている各出入口の性格から推測したものである^{注5)}。なお、

表 1-1 対象作品

通番	年	図面番号	作品名	延坪	構造	通番	年	図面番号	作品名	延坪	構造
1	1919	200A	吉井邸A	123.0	木 2	44	(1942)	227B	渡辺邸B	48.6	木 1
2	1922	38	大木邸	100.1	木 2	45	(1942)	211	横田地邸	39.0	木 1
3	(1924)	79	黒田邸	115.3	木 2	46	1943	148	中橋邸	72.2	木 1
4	1925	99	志水邸	72.3	木 2	47	1943	197	山川邸	46.0	木 2
5	1926	55	柏木邸	48.3	木 2	48	1943	203	山口邸	21.9	木 1
6	1928	8	足立邸	76.0	木 2	49	(1943)	3	青島邸	19.3	木 1
7	1928	13	石川邸	65.5	木 2	50	(1943)	163A	野村邸A	38.5	木 1
8	1929	97	佐野邸	70.3	木 2	51	(1943)	213	吉岡邸	22.5	木 2
9	1930	80	黒田邸	136.1	木 2	52	1944	216	吉田邸	28.9	木 2
10	1931	113A	関谷邸A	35.7	木 2	53	1944	23	岩波賢住宅	15.8	木 2
11	1931	113B	関谷邸B	77.8	木 1	54	1944	163B	野村邸B	39.3	木 1
12	1933	106	杉本邸	90.9	木 2	55	(1944)	164	野村賢住宅	31.3	木 1
13	1933	222A	吉住邸A	46.5	木 1	56	(1946)	107	杉本邸(改)	89.6	木 1
14	1933	33	参木邸	67.3	木 2	57	(1946)	182	某氏邸	116.1	木 1
15	1934	199	山田邸	52.0	木 2	58	(1946)	195B	山内邸B	29.5	木 2
16	1934	92	小林邸	66.6	木 2	59	1947	121	田中部	38.6	木 1
17	1934	88	小島邸	82.8	木 2	60	1950	221	吉屋邸	48.5	木 1
18	1935	82	鈴木別邸	127.0	木 2	61	1952	117	高須邸	64.9	木 2
19	1935	49	岡田邸	154.6	木 2	62	1954	222C	吉住邸C	52.6	木 2
20	1935	73	木場邸	48.8	木 2	63	1954	46	太田邸	39.2	木 1
21	1935	75	倉田邸	55.5	木 2	64	1955	205	山路邸	46.5	木 2
22	1936	220	吉屋邸	77.1	木 2	65	1955	222D	吉住邸D	48.6	木 2
23	1936	69	杵屋別邸	47.1	木 2	66	1955	76	倉田邸	61.2	木 2
24	1936	158	丹羽邸	44.0	木 2	67	1955	188	真鍮邸	62.4	木 1
25	1936	176	福島邸	160.9	木 2	68	(1955)	10	鮎川邸	109.6	木 2
26	1937	151	新聞邸	172.8	木 2	69	1956	198	山形邸	130.6	木 2
27	1938	120	田島邸	184.1	木 2	70	(1956)	11	鮎川邸	163.0	木 2
28	1938	222B	吉住邸B	223.6	木 2	71	1957	150	中村邸	70.1	木 2
29	(1939)	195A	山内邸A	50.3	木 2	72	1957	110	鈴木邸	139.7	木 2
30	1940	202	山口邸	94.8	木 1	73	1958	25	梅原邸	74.2	木 1
31	1940	51	岡田別邸	30.2	木 2	74	(1959)	14	井関邸	129.0	木 2
32	1940	1	青木邸	60.9	木 2	75	(1959)	177	福田邸	72.5	木 1
33	1940	165	長谷川邸(改)	42.9	木 1	76	1960	95	佐々木邸	135.1	木 2
34	1940	40	大島邸	186.0	木 2	77	1960	189	水谷邸	93.0	木 2
35	1940	56	加藤邸	198.8	木 2	78	1960	94	坂西邸(改)	59.7	木 1
36	1940	24	岩波別邸	33.0	木 1	79	1962	219	吉屋邸	62.0	木 1
37	1940	126	谷口邸	137.1	木 2	80	1962	48	岡野邸	85.8	木 2
38	1941	215	吉田邸	46.2	木 2	81	1963	68	北村邸(改)	92.7	木 2
39	1941	172	平井邸	34.0	木 1	82	1965	28	梅原邸	60.1	木 2
40	1942	91	小橋邸	30.3	木 1	83	1965	185	松岡邸	89.6	木 1
41	1942	168	浜野邸	30.2	木 2	84	1967	228	猪股邸	123.9	木 1
42	1942	111A	須藤邸A	30.3	木 1	85	1969	64	岸邸	225.6	木 2
43	1942	111B	須藤邸B	22.0	木 1	86	1971	232	御膳谷邸	169.3	木 2

「通番」は、本論文における通し番号で、「年」は『吉田五十八建築展図録』を参照しているが、記載のないものは図面に記載された最新の年を括弧付で表記している。また、「図面番号」は東京藝術大学美術館における作品番号で、同一番号内の別作品は、年代順に英字で区別している。さらに「作品名」は、図面及び『吉田五十八建築展図録』を参照し、(改)は増改築作品を示している。なお、「構造」の、「木」は木造、「コ」は RC 造の略で、数字は階数を示す。

表 2-1 アプローチにみる表と裏



門の位置が図面から判明しない場合は、表中空欄としている。表 2-1 のパターンに示すように、A は 1 つの門から表玄関、内玄関、勝手口へ移動する。これに対し B から F は門が 2 つあり、例えば B であれば、大きい門から表玄関と内玄関へ、小さい門から勝手口へ移動する。このように、門の数と各出入口との組合せから 6 種類のアプローチ方法が確認された。

表をみると、まず A は、全体を通して確認できるものの、

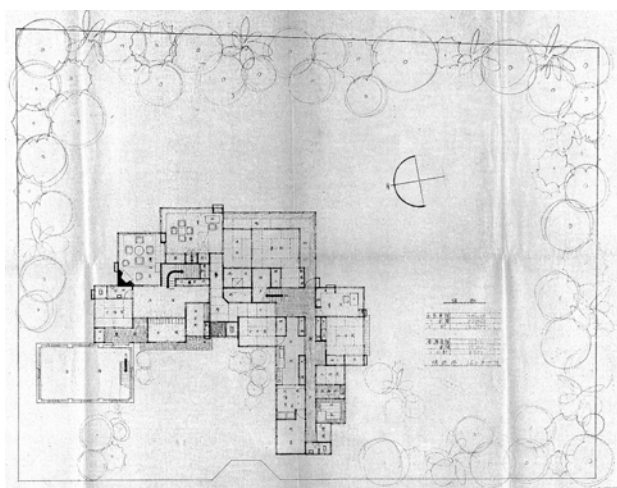


図 2-1 A の事例 (25, 福島邸配置図, 1936 年)

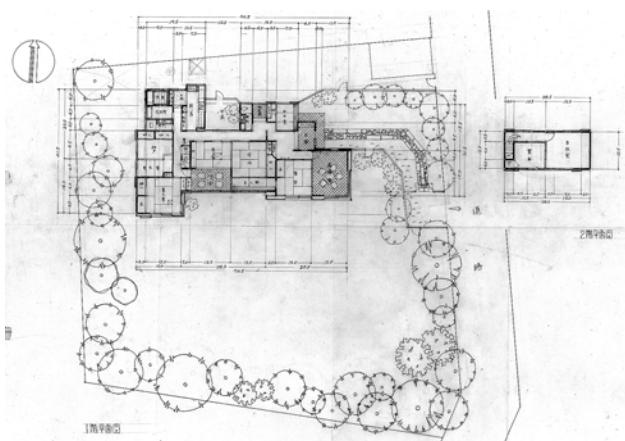


図 2-2 E の事例 (61, 高須邸配置図, 1952 年)

特に 1940 年頃まで集中している。これに対して、1940 年を過ぎた頃から C～E が増加する傾向にある。これらは、いずれも表玄関へのアプローチを独立させ、内玄関や勝手口へは別のアプローチを用意したものである。この他、B や F は少数である。

すなわち、1940 年頃から、一つの門を抜け各出入口へアプローチさせる方法(図 2-1)から、表玄関とは別に内玄関および勝手口への門を独立させる方法に(図 2-2)、変化する傾向が読み取れる。ただし、C は戦前にも少なくないので、表玄関と勝手口へのアプローチを分ける考えは当初から存在していたが、1940 年頃からは表玄関と内玄関のアプローチを分ける考えが顕在化したものと指摘できる。

吉田の住宅作品では、1942 年頃から、内玄関の位置が、表玄関から勝手口へと近づくことが指摘されているので、表 2-1 から得られた結果は、その傾向と合致する^{注 6)}。また、従来の近代住宅史研究では、大正中期以降の生活改善の動きとして、接客重視から家族重視への意識の変化が強調されてきたが、実際の計画からそれとは逆行する結果が得られたことには、十分注意をしたい。

2-2 廊下に見る表と裏

では、以上のようなアプローチの変化に対して、住宅内部の動線にはどのような変化があったのだろうか。吉田の住宅作品を概観すると、建具を用いて廊下を区画した事例が多くみられ、その前後で空間の性格は大きく異なっている。そこで次に、建具が生み出す廊下の区画に着目し、各居室がどの区画に接続したのかを分析し、廊下空間の性格とその変化を探りたい^{注 7)}。

表 2-2 は、建具による廊下の区画が確認できる 48 作品について、各居室の接続する位置を分析したものである。区画された廊下の内、表玄関に接続する区画(以下、表廊下)に接続する居室を「●」、表廊下より奥側の区画(以下、裏廊下)に接続する居室を「○」で示している。48 作品の中には、廊下の 2 箇所以上に建具を設けて 3 以上の区画をつくる事例もあるが、その場合は表玄関に最も近い建

表 2-2 廊下に見る表と裏

通し番号	1926 no.5	1931 10	1934 15	1935 20	1936 25	1940 30	1940 35	1942 40	1942 45	1943 50	1944 55	1950 60	1955 65	1956 70	1959 75	1962 80	1969 85
客間	●●●●	●	●●●●	●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●
書斎	●●●●	●	●●●●	●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●
応接室	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●	●●●●
居間	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●
食堂	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●
茶の間	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●
寝室	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●
子供室	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●
台所	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●
女中室	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●
浴室	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●	○●○●

凡例: (●)表廊下に接続するもの (○)裏廊下に接続するもの (○●)表廊下と裏廊下両方に接続するもの *推測を含むもの

具を選択した。なお、各居室の種類は図面中の表記に従って判断し、11 種類を示しており、推測を含むものには「*」を付け参考とする^{注8)}。

表 2-2 で接客に関係する居室をみると、「客間」や「応接室」は全体を通して表廊下に接続している。次に、家族室について確認すると、「居間」は 1940 年頃から、「茶の間」は 1950 年頃から表廊下に接続する事例が増加している。ただし、「食堂」は戦前期の事例が少数であるがほと

んどは表廊下に接続している。また、逆に「寝室」は基本的に裏廊下に接続している。その上で、水まわり空間をみると、「台所」は 1950 年頃から、「女中室」は 1940 年頃から表廊下に接続する事例が増加しているが、「浴室」については変化がみられず基本的に裏廊下に接続している。

以上から、全体を通して接客室は表廊下に、当初裏廊下に接続していた「居間」、「女中室」は 1940 年頃から、「茶の間」や「台所」は 1950 年頃から表廊下にも接続するようになった。これは戦前から戦後にかけて、表廊下の区画が拡大したことを示す(図 2-3、図 2-4)。

吉田に関する既往研究では、1955 年頃から「茶の間」が減少し、「食堂」が増加、「居間」が椅子座化して「居間・食堂」となる事例の増加傾向が指摘されている。また、その際、「応接室」は「玄関ホール」と一体的に扱われるなど、簡易化する傾向も判明しており、接客機能が「応接室」から「居間」や「食堂」へ移転したとの指摘もある^{注9)}。すると、表 2-2 が示す結果は、こうした起居様式の変化や接客機能の移転と整合している。ただし、既に述べたように、吉田の住宅作品では 1942 年頃から内玄関が表玄関脇から勝手口附近へと移動する傾向が確認されている。従って、表玄関から内玄関への見通しを制御するために建具が設置され、表廊下の区画を狭めていた可能性もあり注意したい。

2-3 水まわり諸室相互と食事室の関係

以上の分析では、1950 年頃から台所が食事室とともに表廊下と接続する事例が増えていた。また、浴室だけは変化がみられず、結果として水まわり空間における浴室の性格の違いが浮き彫りになった。とすると、台所と食事室の関係や水まわり空間相互の関係も変化した可能性がある。そこで、台所、女中室、浴室、食事室と女中の使用が想定される下便所を加えてその変化を探りたい。

表 2-3 には、女中室、台所、浴室、下便所を対象に、相互の関係を示している。表中の記号は、相互に直接連絡するものを「●」、隣接するが連絡はしないものを「○」で表記し、1 室以上離れる場合には空欄としている。台所と食事室の間にハッチがある場合は「H」を付す^{注10)}。

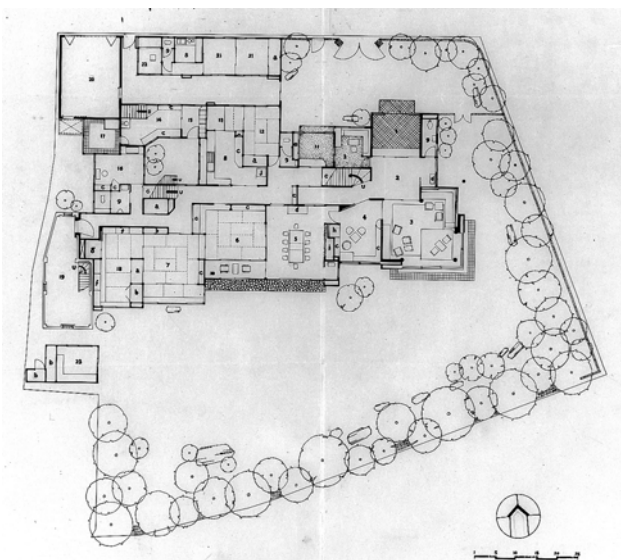


図 2-3 戦前の表廊下(27, 田島邸平面図, 1938 年)

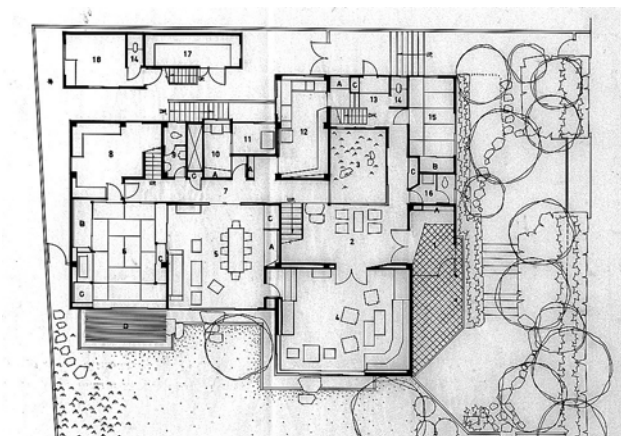
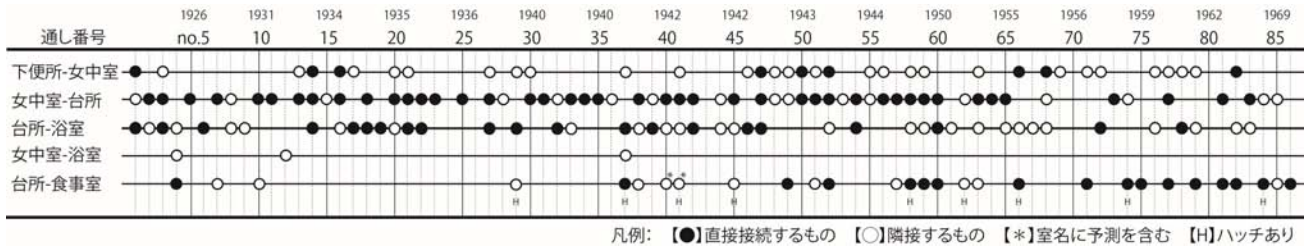


図 2-4 戦後の表廊下(76, 佐々木邸, 1960 年: 上が北)

表 2-3 水まわり空間がつくる裏動線



まず表 2-3 から水まわり諸室の相互関係をみると、台所と浴室は1943年頃、台所と女中室は1955年頃から直接連絡するものが減少傾向にある^{注11)}。一方、女中室と下便所の関係は、全体を通して直接連絡するものが9作品確認できる。この9作品には、1943年の山川邸(47)や1944年の吉田邸(52)など、戦時下において面積の制約を受けたものも含まれている^{注12)}。また、1965年の梅原邸(82)は、総2階建て60坪の住宅で、60年代の吉田の他の作品に比較して規模は小さい。こうした住宅においても女中室内に便所が設けられていることは、当時の女中に対する意識を知る上で重要である。なお、女中室と浴室との相互関係については、1室以上離れたものがほとんどであった。

その上で、下便所、女中室、台所の3室が廊下を使用せずに直接連絡するものは1944年までに5作品、女中室、台所、浴室の3室が直接連絡するものは1950年の吉屋邸(60)までに10作品が確認される(図2-5)。このよう

に、1950年頃までは水まわり空間のみで作られる一連の家事動線が存在したが、以降は消失の道をたどる。

ところがそうした傾向に対して、台所と食事室の関係はより密接になっている。表2-3をみると、当初、「台所」と「食事室」は基本的に直接連絡しない関係であったが、1943年頃から直接連絡する事例が増加する。アプローチに関して接客を重視するかのような姿勢を示した吉田の作品に^{注13)}、こうした変化が確認できる意味は、当時の台所に対する意識を知る上で重要である。

3. 展開図および詳細図にみる水まわり空間

ここでは、設備等が描きこまれた展開図及び詳細図を用いて、水まわりを代表する諸室である台所、浴室、便所の室内空間の変化を分析する。こうした諸室では、とりわけ、採光や換気のパフォーマンス、清掃のしやすさといった衛生面や作業能率が追求されてきた。そのことが、平面形状や各部寸法、床や壁の仕上げ材料、その他設備等の仕様に如何に反映されているのかを読み取る。

3-1 台所

3-1-1 台所の仕様

まず、台所各仕上面の分節方法とそれに対する材料の組合せについて分析をする。仕上面の分節方法は表3-1のパターンに示す通りで、床、流し下の床、腰壁、壁、小壁、天井の6つの面について検討した結果、46作品においてAからGまでの7種類が見出された^{注14)}。

表3-1をみると、上記の判断が可能な作品は1934年頃から増加する。そこでは、床面と壁面で分節がみられるCやDを主軸に、1942年頃から床面の分節がないFが加わったが、その傾向は1955年頃まで続いている。しかし、1955年以降は、各面で材料を分けたAがほとんどになり、最終的には壁面と天井面の材料を同一としたGもあらわれる。

ここで、1924年の黒田邸(3、図3-1)等でみられたAの事例は、材料の種類がはっきりしないが、床はリノリウムで統一されており^{注15)}、壁も一面で同じ材料が使用されている。また、天井は平滑で、他の図面の表現と比較すれば左官材料が用いられたと推測できる。一方1955年頃からみられるAは、床がビニールタイルやPタイルで、壁面全体がタイル貼りで大壁の表現になっており、天井は漆喰やペンキ仕上げになっている。

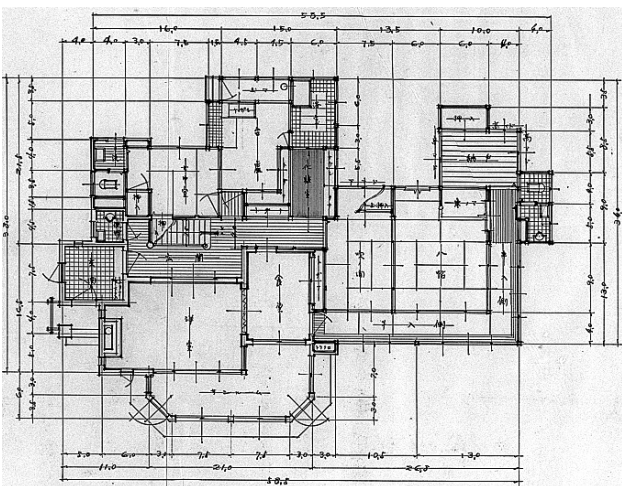


図 2-5 水まわり空間の家事動線(14、参木邸, 1933 年)

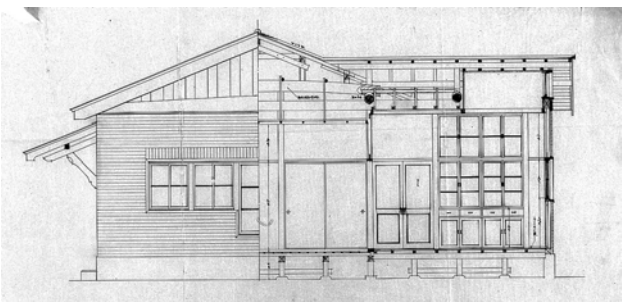


図 3-1 初期の A の事例(3、黒田邸台所詳細図, 1924 年)

表 3-1 台所の仕様

通し番号	1926 no.5	1931 10	1934 15	1935 20	1936 25	1940 30	1940 35	1942 40	1942 45	1943 50	1944 55	1950 60	1955 65	1956 70	1959 75	1962 80	1969 85
各仕上面の分節方法	A	B	C	D	E	F	G										
天井			左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左
小壁			左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左
壁			左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左	左
腰壁		研	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ	タ
流し下床	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木
床	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木	木
揚板の有無	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●

凡例: 【木】木材 【タ】タイル 【左】左官材料 【研】人工研出し 【リ】リノリウム 【ビ】ビニールタイル 【ベ】ペンキ 【P】Pタイル 【長】長尺シート

パターン

天井

壁

腰壁

流し下

小壁

床

A B C D E F G

表 3-2 台所の「斜め線」

通し番号	1926 no.5	1931 10	1934 15	1935 20	1936 25	1940 30	1940 35	1942 40	1942 45	1943 50	1944 55	1950 60	1955 65	1956 70	1959 75	1962 80	1969 85
台所の斜め線	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
床	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
仕器																	

このように、台所の材料の使い方は、1955 年頃までは水のかかりやすい部分にのみタイル等を用い、壁または小壁と天井を漆喰とする組合せを主軸としている。ただし、1942 年頃からは、床を単一の材料とする例もあらわれる。

そして 1955 年頃からは、床をビニールタイルや P タイル、壁をタイル、天井を漆喰やペンキとして各面を明確に分けるようになる(図 3-2)。最後の 2 作品は、壁と天井をメラミン化粧合板で統一しており、より単純な構成である。全体として台所各面の材料の組合せは、使用する材料が多様な機能を担った化学製品に代わることで、面内での分節をやめ、各面毎の分節へと進んだと捉えることが

出来る。

3-1-2 台所平面にあらわれた「斜め線」

一方、台所内部に顕れる形状に着目して対象作品を概観すると、平面上で斜めの線が出現する時期があり、水平垂直を基本とする空間にあってその印象を大きく変えたものと思われる。平面上の「斜め線」の有無を分析すると、それは土間の上がりや調理台や棚といった什器類に確認される(表 3-2)。なお、台所と浴室が隣接し、その境界となる壁の「斜め線」が平面図に描かれている事例については浴室の分析で扱う。

この表をみると、1925 年の志水邸(4)を最初として、特に 1934 年の小林邸(16)以降台所から土間への降り口に

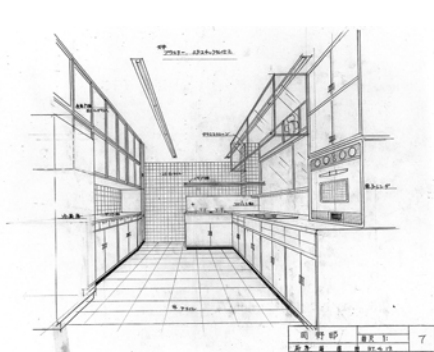


図 3-2 戦後の A の事例
(80, 岡野邸台所透視図, 1962 年)

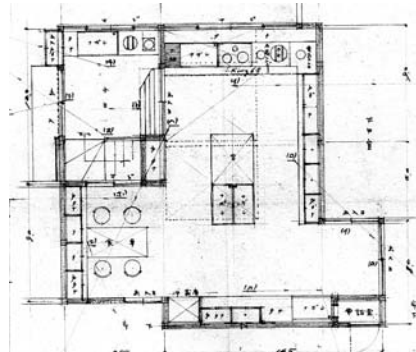


図 3-3 加藤邸台所
平面詳細図 1 (35, 1940 年)

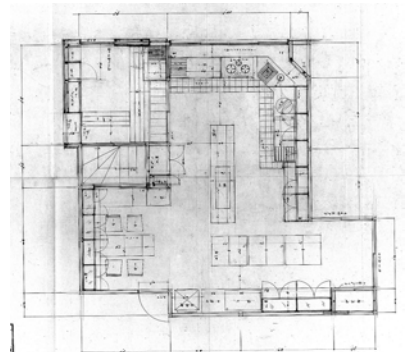


図 3-4 加藤邸台所
平面詳細図 2 (35, 1940 年)

表 3-3 台所の採光と換気

通し番号	1926 no.5	1931 10	1934 15	1935 20	1936 25	1940 30	1940 35	1942 40	1942 45	1943 50	1944 55	1950 60	1955 65	1956 70	1959 75	1962 80	1969 85
採光面	1	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	2以上	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
天井形状	平ら	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	切上げ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
換気設備	ファン	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ガラスフード	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
内法上の窓	不明	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
	回転	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	引違い	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	内倒れ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

多く「斜め線」が確認される。また、1938年の田島邸(27)以降は、調理台や棚の角、あるいは入隅部分に「斜め線」が確認されるようになる。調理台や棚に、こうした部分が確認されることは、床面よりも台所空間の印象を大きく変えただろう。

こうした「斜め線」からは、家事動線に対する試行錯誤の過程をみてとれる。図 3-3 は、1938 年 4 月時点の加藤邸の台所の平面図であるが、これが同年 7 月の図面(図 3-4)では、調理台の入隅部分に「斜め線」が出現する。こうした家事動線への配慮はその後も継続的にみられる。

3-1-3 台所の採光と換気

以上に加えて、大正・昭和初期の住宅改良の流れの中でことさら重視された採光と換気の問題についても検討する。表 3-3 は、台所の採光と換気について分析をしたものである。まず 1 段目には採光面の数を示している。採光

面は、平面上 3 尺以上の開口部がある場合に算入し、一面か、二面以上で分けている。また、2 段目には天井の形状、3 段目にはファンとフードの有無、4 段目には内法より上にある装置の種類を示している。

まず、表の 1 段目で採光面の数をみると、一面とする作品は全体を通して確認でき、二面以上の採光面をとる作品は、特に 1936 年の杵屋別邸(23)以降に多く確認されるようになる。1922 年の大木邸(2)から 1925 年の志水邸(4)までは、採光面が二面以上となっているが、これらはいずれも洋風の外部意匠でまとめられた作品であり導入の過程として興味深い。

次に表の 2 段目から天井の形状をみる。天井が平らな場合は「平ら」、窓に向かって天井を高くしている場合は「切上げ」に「●」を表記している。これを見るとほとんどは「平ら」であるが、「切上げ」が 1938 年の田島邸(27)までみられる。田島邸の台所展開図(図 3-5)をみると、内法上に回転窓が設置されており、天井はフードに類する形状になっていることが分かる。

表の 3 段目には、ファンとガラスフードの有無を示している。ファンの使用は 1930 年の黒田邸(9)で使用された可能性がある(図 3-6) 注 16)。屋根伏図には台所上部の煙突まで描かれている。ファンは、これ以降戦時期を除く時期に継続的に確認できる。これを追うように、フードの使用が認められるようになるのは 1937 年の新聞邸(26)以降で、1969 年の岸邸(85)がステンレス製である以外は、ガラスフードである。1940 年の長谷川邸(33)、1962 年の吉屋邸(79)においては、現存も確認された。

なお、住宅用を謳った換気ファンについては、日立社製の発売が 1935 年には確認されるが、吉田の作品による使用は早い例といえる。また、ガラスフードの事例は、吉田以外の建築家による作品でも確認されるが、実施例は少数と見られる。とはいえ、住宅設計を指南する書籍上では、窓からの採光を減じない工夫として図版とともに屢々紹介されており、知識としては、ある程度共有されていたと見られる。

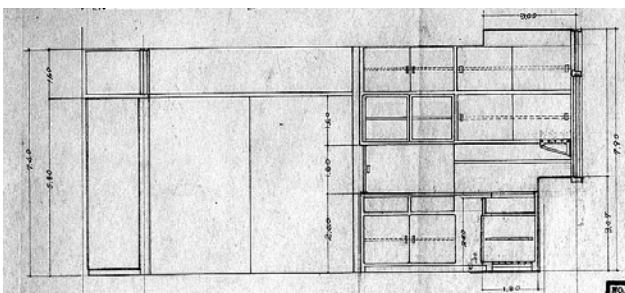


図 3-5 切上天井(27, 田島邸台所展開図, 1938 年)

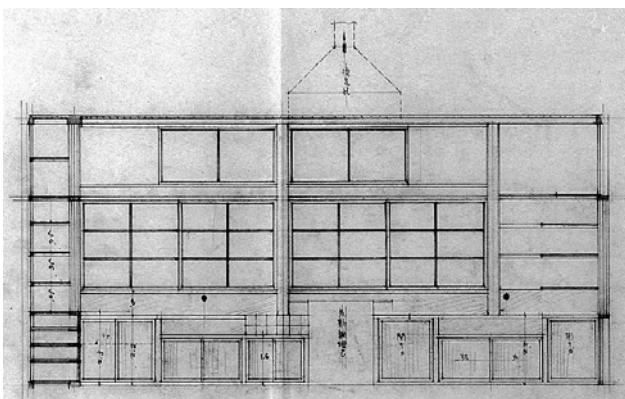


図 3-6 換気扇の初出(9, 黒田邸展開図, 1930 年)

表 3-4 浴室の仕様

通し番号	1926 no.5	1931 10	1934 15	1935 20	1936 25	1940 30	1940 35	1942 40	1942 45	1943 50	1944 55	1950 60	1955 65	1956 70	1959 75	1962 80	1969 85
材料の組合せ方法	A																
	B																
	C																
	D																
	E																
	F																
各面の材料	天井 木木	左	左左	木	木	木木	左	木	木塗	木		木木木	木左左左木木木	左左木	木木左木木ハ左デ木メ		
小壁	左左	左	左左	左	左	左左	左	タ	左左	左タ		左木左	左左タ左左左タ	理	左タ理	理タ左木タ理タタ木木	
壁	木木	左	左左	左	左	左左	タ	タ	左ビ	左タ		左木左	タ左タ左左左タ	理	左タ理	理タ木タ理タタ木木	
腰壁	石タ	タ	タタ	タ	タ	タタ	タ	タ	タビ	理タ		テ青タ	タタタタタタ	理	タタ理	理タタタ理タタ御花御	
床	石タ	タ	タタ	タ	タ	タタ	タ	タ	タタ	御タ		テ青タ	タタタタタタ	理	タタ理	理タタタ理タタ御砂御	

凡例: 【木】木材 【タ】タイル 【塗】左官材料 【石】石材(種類不明) 【理】大理石 【御】御影石 【花】花崗岩 【砂】砂岩 【ビ】ビトロライト 【デ】デコラ 【メ】メラミン

パターン

天井 小壁 壁 腰壁 床

A B C D E F

最後に、表の 4 段目から内法上装置の種類を確認しよう。これをみると、回転窓(図 3-7)は 1922 年の大木邸(2)から戦後すぐまで、その後引き違い窓(図 3-8)が使用されるようになり、さらに 1957 年頃からは内倒れ窓(図 3-9)が使用されるようになる。

付け加えると、衛生面に関連して、調理台や流しの材料がステンレス製に代わるのも、1940 年の山口邸(30)以降であることがわかっており注 17)、ファンとガラスフードの導入時期と重なる。台所の空間は、空気環境、明るさ、清潔さという点において、1940 年頃を境に大きく質的な変化を遂げたといえる。

3-2 浴室

3-2-1 浴室の仕様

浴室各面の材料とその組合せについては、表 3-4 に示している。分析が可能な 40 作品について、床、腰壁、壁、小壁、天井各面に用いられる材料の組合せを検討したところ、6 種類となった。

表をみると、1930 年頃から材料が判断できるものが増え、戦前期は床と腰壁、壁と小壁、天井でそれぞれ材料を分けた B を主軸としていることが分かる。ここで用いられるのは、床がタイル、壁が漆喰を中心とした左官材、天井が木材である。続いて戦後期は、腰壁と壁の上下で材料を分けた D や、壁全体と天井で材料を分けた F が主軸となっている。その際材料は、床がタイルの他大理石などの石材、天井が左官材料の他、木材で、中にはデコラもみられる。全体を通して、使用材料の変化に伴い、戦後期には床

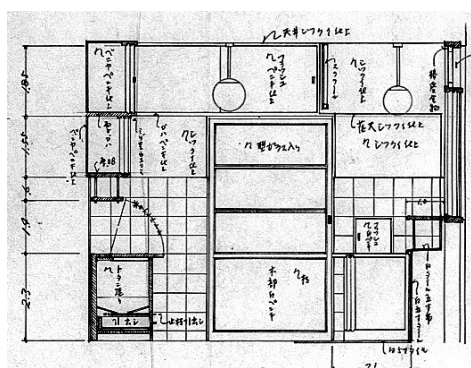


図 3-7 回転窓の一例
(37, 谷口邸台所展開図, 1940 年)

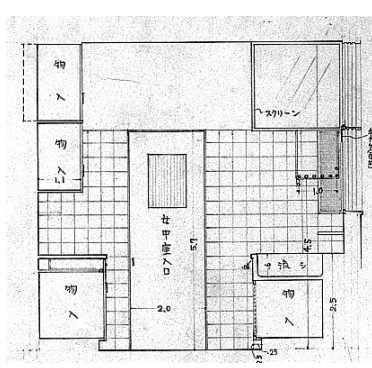


図 3-8 引違い窓
(60, 吉屋邸台所展開図, 1950 年)

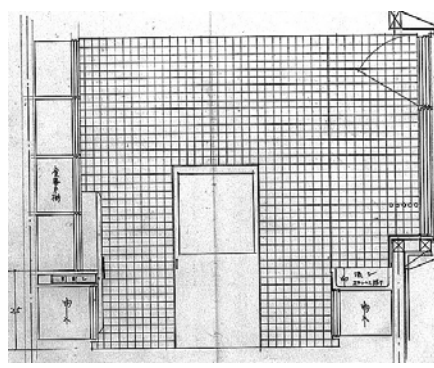


図 3-9 内倒れ窓
(69, 山形邸台所展開図, 1956 年)

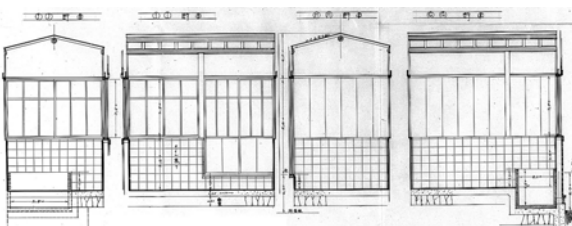


図 3-10 A の事例(2, 大木邸浴室展開図, 1922 年)

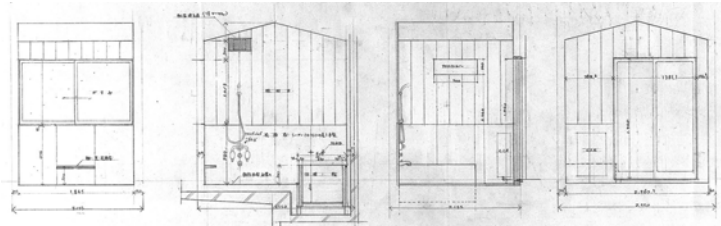


図 3-11 B の事例(85, 岸邸浴室展開図, 1969 年)

表 3-5 浴室の輪郭と踏込み

通し番号	1926 no.5	1931 10	1934 15	1935 20	1936 25	1940 30	1940 35	1942 40	1942 45	1943 50	1944 55	1950 60	1955 65	1956 70	1959 75	1962 80	1969 85
浴室踏込み	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
凹凸	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
斜め線	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏	踏

凡例: 【踏】踏込 【焚】焚口 【下】下駄箱 【外】屋外

表 3-6 浴室の採光

通し番号	1926 no.5	1931 10	1934 15	1935 20	1936 25	1940 30	1940 35	1942 40	1942 45	1943 50	1944 55	1950 60	1955 65	1956 70	1959 75	1962 80	1969 85
採光面	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上	2以上
高さ(尺)	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
浴室窓	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ	鴨居高さ
	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ	敷居高さ

と壁全体が同一の材料で単純化していく傾向が読み取れ、台所との類似を指摘できる(図 3-10, 図 3-11)。

3-2-2 浴室の平面

台所同様、浴室では特定の時期に平面上の「斜め線」や凹凸が確認される(図 3-12)。浴室各面を構成する材料と比較して、そうした平面的な変化も室の成り立ち

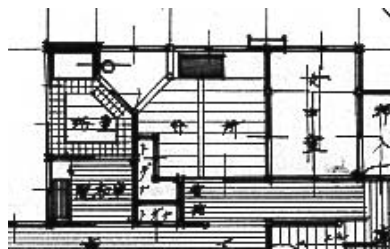


図 3-12 「斜め線」の事例 (21, 倉田邸浴室平面図, 1935 年)

の変化を探る上で重要である。表 3-5 には、浴室の平面形状の分析として、化粧室からの踏込みの有無と、浴室の輪郭に凹凸や「斜め線」があるか否かを示しており、その要因も合わせて推測している。要因は、化粧室と浴室の間に踏込みがあり、その部分に凹凸が生じている場合には「踏」、凹凸や斜め線の壁面背後に焚口や下駄箱が設置されている場合には「焚」や「下」と表記した。

まず、踏込みについて確認すると、1937 年の新聞邸(26)までの時期に限り 8 作品が確認される。踏込みとは、図 3-13 に示すように浴室入口に設けられた化粧室との中間的な場所で、1937 年に向けて徐々に簡易化していく。

次に浴室の輪郭については、平面上凹凸や「斜め線」が 1957 年の中村邸(71)までに 22 作品が確認される。この時、凹凸の壁面背後等、22 作品中 16 作品で「焚口」、1 作

品で「下駄箱」が確認され、「踏込み」も 6 作品で確認できる^{注 18)}。特に何も機能は示されておらず「屋外」となっているものは 1 作品に止まる。したがって、この平面形状は給湯機能の変化に伴う平面的な変化を顕著に示す事例だといえるだろう^{注 19)}。なお、こうした平面形状の浴室は、吉田以外の同時代の作品にも屡々見られるもので、水まわりを設計する手法としてある程度認識されていたと推測される。その後、浴室の平面形状は化粧室と浴室の間の踏込みの消失や、給湯機能の変化に伴い 1955 年頃からより単純化される。

3-2-3 浴室の採光

ではその際、浴室の採光にはどのような変化が見られるのだろうか。浴室の採光面の数と、窓の高さ方向の寸法を表 3-6 に示す。

まず、採光面数については、浴室のある 81 作品のうち、2 面以上は 33 作品と半数を下回る。しかし、これを戦前と戦後で分けると、戦前は 25 作品、戦後は 8 作品となり、大きく状況が異なる。特に 1955 年頃からは、採光面を 1 面しか確保しない作品が多数を占めている。戦前期は、衛生面から採光と換気が重視され、浴室の 2 面採光が奨励されていたことを反映したものと捉えられる。

ではその際、窓の高さはどのように変化したのだろうか。吉田の浴室を概観すると、化粧室から浴室に入る出入口と浴室内の窓は、鴨居の高さが揃っている。その上で、窓の敷居下端をみると、新聞邸(26)までは床面から 3 尺以上あるのに対し、以降は岸邸(85)を除き 3 尺を超える

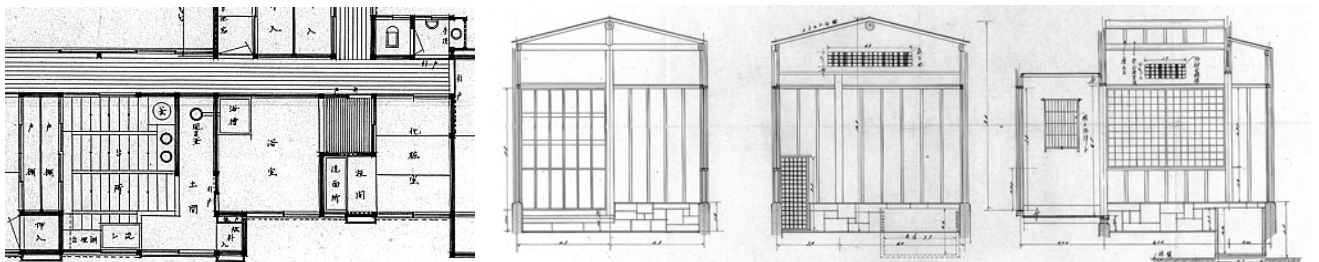


図 3-13 踏込みの事例 (1, 吉井邸 A 浴室平面図と展開図, 1919 年)

表 3-7 浴室の段差と敷居の材料

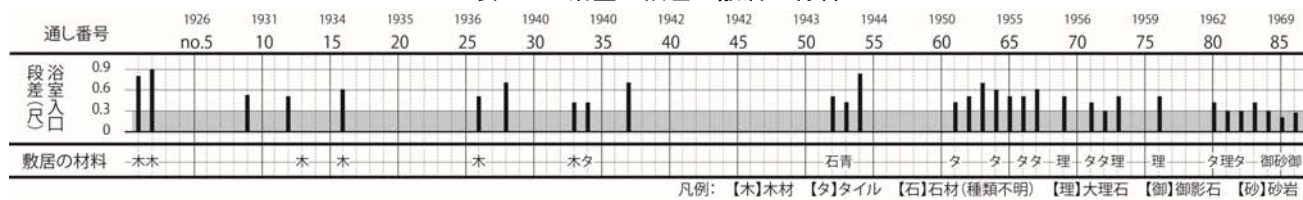
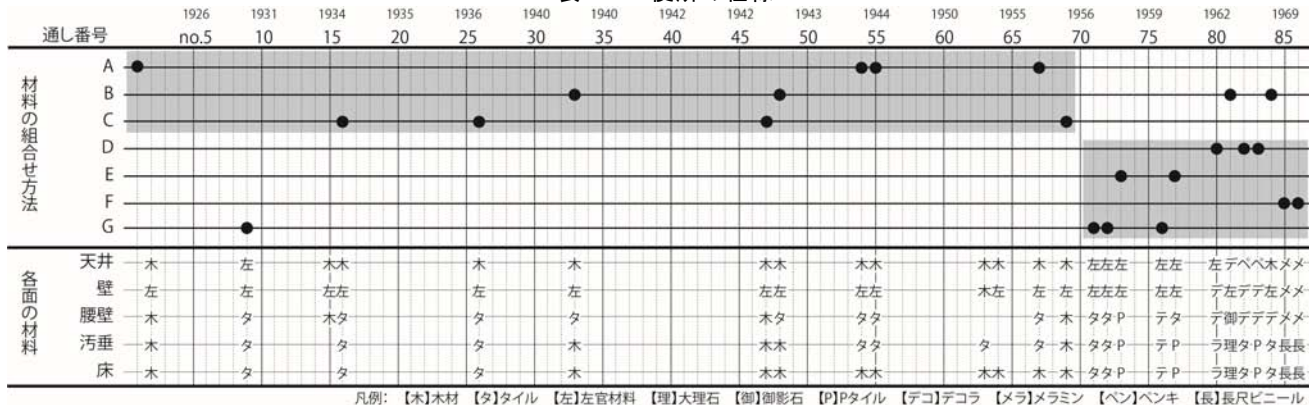
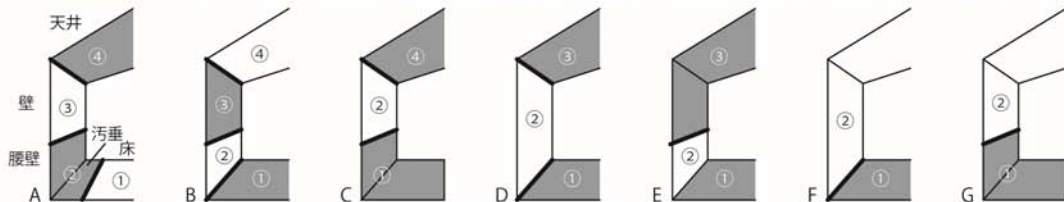


表 3-8 便所の仕様



パターン



ものではなく、その寸法は低下している。

一方、窓内法の高さ方向の寸法は、1938 年の吉住邸(28)以降は4尺を超えるものがほとんどになる。つまり、採光面自体は減少傾向をみせるが、窓の丈は拡大したことが分かる。

採光面数の減少傾向と考えあわせるなら、幅で確保していた窓の面積を、高さで補っていたことが推測される。

3-2-4 浴室の段差と敷居

前記した浴室における踏込みの消滅には、化粧室と浴室との段差の縮小が関係しているとみられる(表 3-7)。

事実、その段差寸法を確認すると、1919 年の吉井邸(1, 図 3-12)で 0.75 尺、1922 年の大木邸(2, 図 3-10)で 0.9 尺あった段差が、徐々に縮小し、1967 年の猪股邸(84)、1971 年の御器谷邸(86)では 0.3 尺、1969 年の岸邸(85)に至っては 0.2 尺となることが分かる(図 3-11)。

また、化粧室から浴室への入口の敷居を確認すると、当

初は「木」が使用されていたのに対して、1940 年の大島邸(34)以降石材やタイルに変更となる。木材を使用した長谷川邸(33)とタイルを使用した大島邸で段差に変化がないため、材料の変化が果たした役割は決定的とは言えないが、その後の段差縮小を支持する材料になったといえよう。

以上の結果を踏まえると、浴室空間は出入口の敷居の変化にともなって段差が縮小し、踏込みも消える。また踏込みや焚口の消失にともなって凹凸のある平面が採用されなくなる、という過程を辿っている。

3-3 便所

3-3-1 便所の仕様

まず、上便所の仕様から確認したい。表 3-8 には、上便所の床、汚垂部分の床、腰壁、壁、天井について、材料とその組合せを示し、分析可能な 26 作品より A から F までの 6 分類が得られた。具体的に確認すると、おおむね各面に

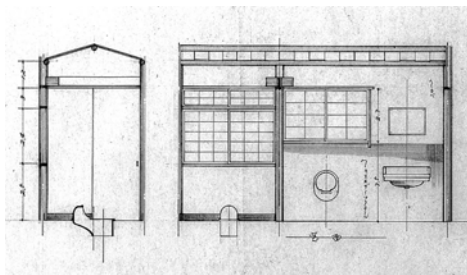


図 3-14 B の事例
(33, 長谷川邸便所展開図, 1940 年)

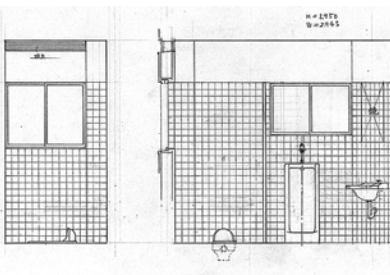


図 3-15 E の事例
(73, 梅原邸便所展開図, 1958 年)

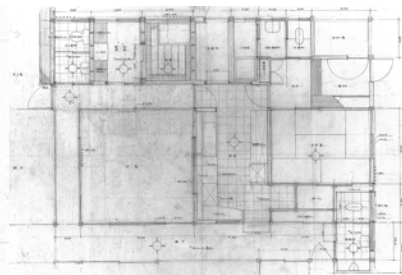


図 3-16 和便器の上便所の例
(83. 松岡邸平面詳細図, 1965 年)

表 3-9 便所の和洋

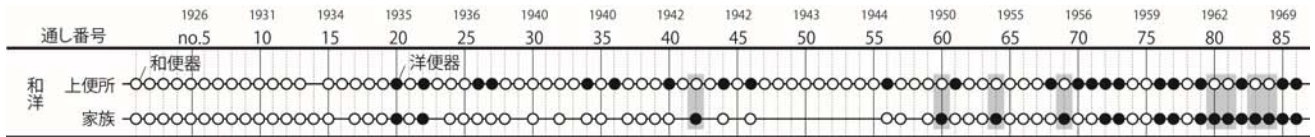
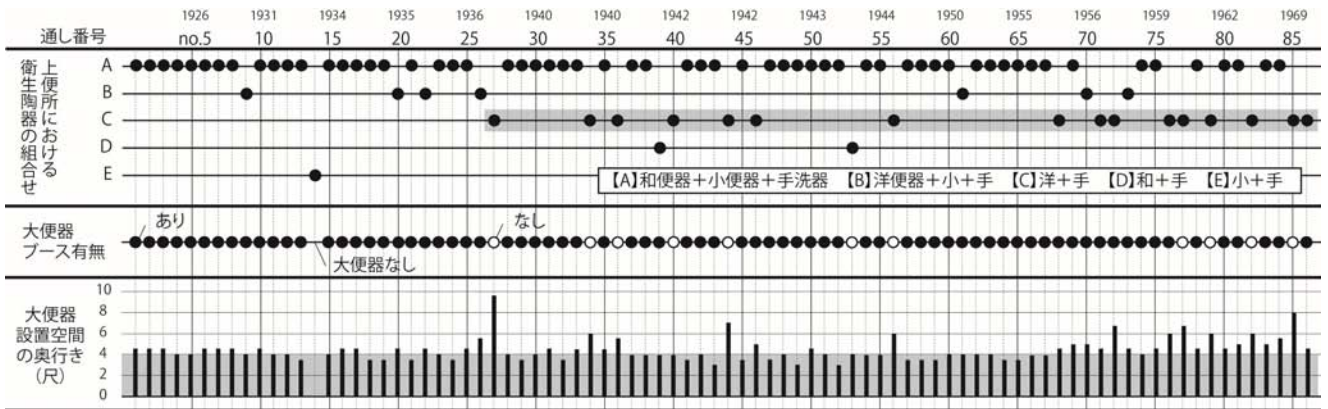


表 3-10 衛生陶器の組合せ



4種類の材料を用いたAからCが1956年まで、3種類以下の材料を用いたDからGが1957年以降に確認される。つまり、全体としては1957年前後で用いる材料の数が減少している。材料をみると、1956年以前では、壁と天井を「左官」と「木」で分割していたのが、以降は「左官」で統一する傾向が現れる他、汚垂部分を床面と分ける事例が消えている。加えて、1962年以降は、壁に「デコラ」や「メラミン」を使用するようになる(図3-14、図3-15)。材料の変化による分節線の減少は、台所や浴室と同様である。

3-3-2 上便所と家族便所の和洋

吉田の住宅作品においては、戦前から戦後にかけて小便器の数が減少し、1957年頃には洋便器の数が和便器を追い抜く^{注20)}。これは、便所の空間を左右する重要な変化であり、便所に対する意識にも大きな変化があったものと思われる。そこで、ここでは上便所と家族が利用する便所との比較を通して、便所に対する意識の変化とともに、洋便器普及の影響について探りたい^{注21)}。

表3-9には、上便所と家族便所について、大便器の和洋を示している。表中、「●」は洋便器、「○」は和便器を示す^{注22)}。洋便器は、1954年頃までは上便所に優先的に使用されているが、以降は家族便所にも頻繁に使用が確認される。また、上便所に和便器、家族便所に洋便器と、使用する便器の種類が逆になる事例も散見されるようになったことは注目される(図3-16)。1957年頃には洋便器の数が和便器の数を越えることから、必ずしも洋便器が優位ではなくなった時勢を示しているように思われる。

3-3-3 洋便器導入の影響

以上では、上便所にあえて和便器を使用した事例から、特に1954年頃からの意識の変化に言及した。しかし、全体としては洋便器を使用する事例が多い。洋便器と和便

器では、適切とされる広さが異なり、その平面にも影響があったと思われる。ここではまず衛生陶器の組合せを確認し、大便器ブースの有無、大便器が設置された空間の長手寸法から、その影響を考察したい(表3-10)^{注23)}。

表の1段目には、上便所における衛生陶器の組合せを示している。表中の記号は、和風大便器、洋風大便器、小便器、手洗器を想定した5つの組合せである。表をみると、全体を通してAの組合せ(和+小+手)が多くみられる。特に1935年までは、この組合せがほとんどで、以降はCの組合せ(洋+手)が現れ、特に1955年以降増加する。他の組合せは少数である。

次に、表の2段目には、上便所内に大便器ブースがあるか否かを示している。これをみると、大便器ブースのない最初の事例は、1938年の田島邸(27)で、これ以降11作品で確認できるが、そのほとんどがCの組み合わせに対応する。

最後に、表の3段目から、大便器が設置された空間の長手寸法を確認する。大便器ブースが無い事例については、大便器の他、複数の衛生陶器を含んで便所内が一室空間になっており、一室全体の長手寸法を示している。表をみると、特に大便器ブースの無い作品で長手寸法が大きくとられていることが分かる。既に述べたように、これらの作品は、ほぼ洋便器と手洗器の組合せ(C)に対応していることから、洋便器の採用が小便器を取り除き、便所内から細かな分節を無くし、さらには一室を広く残して便所空間を単純化させたと指摘できよう。

4. 結語

以上、本研究は大正・昭和期の都市上中流住宅におこった水まわり空間の具体的な変容過程を、吉田五十八の住宅作品を通して分析した。その結果は次の通りである。

第2章では、1940年と1950年頃に転換点が確認された。1940年頃には、一つの門から表玄関、内玄関、勝手口へとアプローチしていたものが、2つの門を設けて表玄関を独立させるようになる。また、主として接客に関する室のみが接続していた表廊下には、居間や女中室が接続する事例があらわれ、台所と浴室が直接接続する事例が減少傾向を示す。さらに、1950年頃には、表廊下に茶の間や台所が接続する事例が増加し、台所は女中室との関係を希薄化させ、逆に茶の間や食堂と直接接続する事例を増加させる。一方、寝室と浴室の近しさは時代を通じているが、1950年頃からは、上記の変化から、相対的に関係性が高まったと見なせよう。

第3章では、1940年頃、1955年頃に転換が見られた。台所では、フードの役割を果たした天井面の切上げがなくなり、換気扇とガラスフードの組み合わせ、ステンレス製の流しの調理台により、平滑で明るい空間となり、衛生環境の質が変わった。浴室では入口の踏込みの消失や敷居の材料の変更、給湯設備の変更により、その平面形状が矩形に整えられる。また、1955年以降は、当初台所や便所では、流し下や小便器下の床面にタイルなどを用いていたが、Pタイルやデコラといった新材料に変化して床面の材料は統一されることで、水まわり空間に使用される材料や各面の分節数は減少していった。

すなわち、接客空間、生活空間、水まわり空間という3種から成立していた住宅の空間は、1940年頃と1950年から55年にかけての2つの転機を経て、公的空間と私的空間の2種に再編された。その際、水まわりは、その緊密な関係性を崩し、両方に寄り添うように、配置され直したと捉えることが出来る。それと同時に、設備や材料の改変による水まわり諸室の変質が起こっていたことを考え合わせれば、明るく清潔な空間の確保や、諸室に関わる家事労働の低減が、水まわり諸室の配置の融通を実現させたという可能性を指摘できる。

〈注〉

- 1) 大井隆弘：『吉田五十八の住宅作品に関する研究—その変容過程と日本近代住宅史における意義—』、博士論文(東京藝術大学)、2015.3。大井によれば、台所は北・北西、浴室は北東・北西、便所は東から北東・西から北西に集中していることが指摘されている。
- 2) 西山知三は、「中流住宅の規模」(『日本のすまいⅡ』、p.47)の中で、明治中期から大正初期の中流住宅は50坪程度が目安で、大正期以降は中心が30坪前後へ次第に下降し、戦後においてもコンパクト化の流れが続くと説明している。また『住宅建築』(建築世界社、1916)を参照したところ、それぞれの住宅の規模について、普通住宅20～50坪、中流住宅40～90坪、上流住宅80～120坪、華族向き住宅200～300坪と紹介している。本論では、以上を参考に吉田の住宅作品を「上中流住宅」と判断する。
- 3) 図面史料を概観すると、各作品は縮尺1/100の基本図、1/20の平面詳細図や展開図、そして1/10～1/1の詳細図、水まわり空間を含む透視図から構成されている。
- 4) 大井は、設備について、次の内容を分析している[注1)参照]。
・水まわり全体：各面積、方位、並び順、相互関係

- ・台所：設備機器の有無、各設備の材料、調理台の高さ
 - ・浴室：排水方法、浴槽の種類、給湯方法
 - ・便所：便所数と衛生陶器数、便器の品番、水栓化過程
- 5) 台所内の出入口のほとんどは「勝手口」である[注1)参照]。本研究では、これに従い出入口名称の表記がないものも、台所内にあれば「＊」を付けて「勝手口」として扱った[注1)参照]。
 - 6) 注1)参照。
 - 7) 廊下の分析は、本来建具だけではなく廊下の屈折、床面の材料についても検討が必要であるが、それらのうち、最も空間分節の効果の高いものとして建具に着目した。
 - 8) 「＊」を付した居室は「居間」と「茶の間」が中心である。吉田の住宅作品を概観すると、「茶の間」には複数の棚を設置させたものが多い。これは、吉田の発言にもみられ、利便性から住宅の中心に配置すること、出入口の幅を広く取ること、棚を作り付けることが主張されている(「家族中心の新提唱」『報知新聞』、1936.9.1)。一方「居間」は「茶の間」に隣接し、「茶の間」とは異なり床の間に設置されることが多い。
 - 9) 注1)参照。
 - 10) 「直接連絡」とは、直接人が往来可能な接続方法を指す。また、図面中に表記がない場合でも、台所と食事室の間にある棚で、両方から開閉可能で中央に仕切れないものはハッチとして扱った。なお、ここでの食事室は「茶の間」と「食堂」を指す。
 - 11) 注1)参照。
 - 12) 戦時統制下は、1939年の木造建築物統制規則以降を指す。ただし、吉田の住宅作品は、1940年まで延床面積100坪を超えるような大規模な作品も確認され、その影響が確認できるのは1940年の一部の作品以降である。
 - 13) 吉田の接客重視の考え方を伝える記録として、吉田五十八研究室に1963年から勤務した板垣元彬は、吉田を「子供の靴が玄関に脱ぎ捨ててあるなんてオレは嫌だね、なんて感じのある人」との形容もある(板垣先生インタビュー、東京藝術大学美術学部建築科図書室、2008.11)。
 - 14) この組合せは、図面中に表記された材料名のほか、その図面表現からも判断している。
 - 15) リノリウムは1860年にイギリスで発明された材料であるが、いつ頃から日本で使用され始めたのかは明らかになっていない。日本で生産が開始されたのは、吉田による大木邸の3年前の1919年である。宮谷慶一：「統計資料からみた日本近代におけるリノリウムの輸入と生産」(『日本建築学会大会学術講演梗概集(東海)』、pp.189～190、2012.9)による。
 - 16) 黒田邸の図面中には「川北電気土木工事株式会社・東京支店都市電気工事部」による電気工事図面が含まれており、その図面中では台所上部に煙突が描かれている。川北電気はこの時期すでに換気ファンを発売していることから、ファンを使用した可能性が考えられる。
 - 17) 注1)参照。
 - 18) 吉田の住宅作品における台所の土間の機能を調査した既往研究では、1943年頃から焚口が消え、代わりに下駄箱が設置される事例の増加が指摘されている[注1)参照]。ただし、本分析は浴室の平面形状に関するものなので、台所の土間だけではなく、屋外側に焚口が設置されている事例も含めており、焚口が消える年代に相違がある。
 - 19) 吉田に関する既往研究では、1943年頃から焚口のあった場所に下駄箱が設置されるようになる傾向が指摘されている[注1)参照]。
 - 20) 注1)参照。
 - 21) なお、吉田の住宅作品における便所は、汚水浄化槽等の利用を含めて概ね水洗化されていると思われるものの、吉井邸(1)、恩田邸(3)、小林邸(16)、丹羽邸(24)、長谷川邸(33)では、汲取便所の図面が確認される。その場合、汚水浄化槽を応用した改良汲取便所であるが、恩田邸では、初歩的な妻木式が用いられており、上中流の住宅でも、必ずしも水洗式でないことがわかる。
 - 22) 上便所、家族便所は、図面の表記を基本とし、特に指示のないものは表玄関に近いものを上便所、それ以外の便所で最も面積の大きいものを家族便所としている。住宅内に便所が1つしかない場合は空欄とする。
 - 23) ここで「大便器ブース」は、便所内に大便器専用に向けた小区画を指す。